第一部　洋娼の発生

第一章

1、沢田楊子・倉持利恵子　2、真野与喜子・智子・君子
3、山口治子　4、M工場の女子工員たち
5、江東女性軍第一中隊　6、横須賀の遊郭では
7、広島女子青年団員　8、大野てい子・三崎麗子・山田えい子

1　沢田楊子・倉持利恵子

敗戦から約三週間目の一九四五年九月九日午後五時ごろ、東京の沢田楊子（十八・新宿区・旧制女高生）は友達の倉持利恵子（十八・中野区・旧制女高生）といっしょに、空襲

で荒れはてた新宿駅のちかくを歩いていた。楊子は新しいゆかたを、利恵子は白いセーラー服を着ていたので、あたりの疲れきった灰色の群衆のなかでは、ふたりの姿はひときわめだって美しくみえた。ところが街角で、荷物を積んだ米軍のトラックが突然道をさえぎったので、ふたりがその場にたちすくんだとき、トラックのうしろから全速力で走ってきた二台のジープが、彼女たちの左右でぴたりととまった。ジープのなかには三四人ずつのアメリカ兵がにやにや笑いながら座り、そのうちのひとりは小型の機関銃（または拳銃）を群衆の方へむけていた。彼等は口々に「ヘーイ、オジョーサン、ドライブ！」と叫び、怖しさに声もだせないでいる二人をかつぎあげてジープへ放りこむと、群衆にむかって機関銃（または拳銃）を乱射しながらふたたび全速力で淀橋方面へ走りさった。少女たちはジープからとびおりようとしたが、革バンドで手をしばられハンカチで口をふさがれてしまったので、動くことも助けをよぶこともできなかった。ジープは井の頭公園を突っきって、多摩川の方へまっすぐに走っていった。「ハロー、ハロー」と叫びながら追いかけてくる子供たちや笑いながら手をふっている道ばたの娘たちの顔が、楊子の絶望した眼に妙に印象的にうつった。やがてさびしい草原にジープをとめると、兵士たちはセーラー服とゆかたをはぎとり、かわるがわる二人を強姦した。二人は力の限り抵抗したが、無駄だった。失神した彼女たちが気がついたとき、あたりはもう真暗だったが、腕時計をぬすまれていたた

め、時間はわからなかった。利恵子の出血がひどかったので、楊子は起きて医者をさがしにいったけれども、そこは街から遠くはなれたところだったらしく、一軒の人家もみあたらなかった。仕方なくもとの場所に戻ってきてみると、利恵子の姿がなかった。死ににいったんだ、と楊子は直感した。彼女は自分も自殺するつもりで帯をそばの樹の枝にかけたが、気おくれがして死ねなかった。彼女は泣きながら知らない道をあるいて、夜中に新宿駅へもどってきた。途中利恵子のことを警察へ知らせようと思ったのに、どの交番にも警官はひとりもいなかった。

彼女はうちへかえりたくなかった。うちは貧しくはなかったけれど、母がまま母、父は分らずやで、仲良しの兄はまだ復員してなかった。たとえうちにかえったとしても、傷ついた娘をこんな両親があたたかい眼で見守って、前途に新しい希望を持たせてくれるだろうとは、彼女には到底思われなかった。泣き疲れて駅のベンチにぼんやり座っていると、多分午前三時ごろ、飛行服に長靴をはいた若い男があらわれ、親切そうに話しかけてきた。彼女ははじめ黙っていたが、特攻隊の学徒兵だったという男の言葉を信じて（彼女の兄もそうだったから）、少しずつ事情を打ちあけ、叱られるのがいやだからもううちへはかえらない、と泣いた。男はどこからかもうひとり仲間をつれてきて何か相談していたが、僕の家へ泊めてあげようといい、近所の焼ビルへ彼女をつれていった。そのときになって彼

女ははじめてうちへかえった方がよさそうだと思い、逃げだそうとしたが、もうおそかった。ふたりの男は焼ビルのなかで彼女の体をけがした。

翌朝、男たちは彼女をつれて大森へゆき、米軍のジープやバスがたくさん駐車している家へ彼女をぶちこんだ。その家には大勢の女たちがいて、夜となく昼となくアメリカ兵に体を与えていた。彼女もその晩から強制的に働かされるようになった。例の飛行服の男は「俺はカントクだ」といって、彼女が怠けるたびになぐったりけったりした。ほかの女たちと話したかったが、それさえ許されなかった。ぶちこまれてから四日目、彼女は、高いコンクリート塀をこえて逃げだそうとしたひとりの女が警官とカントクの男につかまって背中に焼きごてをあてられるのをみた。

楊子と利恵子のうちでは警察へたのんで娘をさがしてもらおうとしたが、受付の警官が手帳にふたりの名前を書きこんだだけで、あとは何もしてくれなかった。（敗戦直後の無警察状態のなかでは、これでもまだいい方だった。）ジープでつれさられたということだけはわかったけれども、そのあとの行方はまったく不明であった。しかしそれから二十日ほどたって、利恵子の水死体は多摩川の岸にうちあげられたのだった。（類似例一七）

2　真野与喜子・智子・君子

真野与喜子（十九・神奈川）智子（十六）君子（十三）の三人姉妹は、兄の与一郎（二十二）といっしょに、厚木飛行場から二里ほどはなれた家に住んでいた。一九四五年九月十一日、武装した八人のアメリカ兵が二世の通訳をしたがえ、「武器がかくしてないか調べる」という理由でうちにはいってきた。彼等はそこら中を散々かきまわしただけでいったん引きあげたが、その晩ふたたびやってきて、「サーヴィスのためムスメたちをだせ」といった。「できない」と与一郎がことわると、「では勝手に借りてゆこう」と二世がいい、アメリカ兵たちはてんでに、悲鳴をあげる三人におそいかかった。与一郎が野球のバットをもってきてひとりの兵隊をなぐったとき、他のふたりの兵隊の自動小銃が火をふき彼はその場に倒れて死んだ。それから姉妹はめちゃくちゃな暴行を受け、智子などは裸のまま玄関の石の上へ投げだされた。夜中になると兵隊たちは煙草をふかしながら「ゴメンナサイ」といってかえっていった。十日ののち、子宮の傷から敗血症をおこした君子は苦しみながら死に、智子はしばらくして発狂した。与喜子は横浜で街娼の仲間にはいり、一時安浦※ハウスにもいたが、その後の行方は知れない。（類似例九）

※横須賀の米軍慰安所

3　山口治子

東京の山口治子（二十六・港区）は、一九四五年九月十二日の夕方、渋谷の闇市で米を買い、ついでにマーケットのなかの靴屋で靴を直そうとした。その店にはちょうど美男子のアメリカ兵がふたり来合せていて、彼女の靴のために本物の革とクリームをくれ、しきりに彼女の美しさをほめた。「あなたの美しさのために乾杯！」ひとりの兵隊がそういって、ポケットからだしたウイスキー（？）を小さなグラスで無理に彼女にのませた。そのうち靴屋はどこかへいなくなってしまい、しばらくすると彼女はねむくなって、変にぐったりしてきた。兵隊が店の奥へ彼女をつれていってねせたところまでは知っていたが、あとのおぼえはなくなった。

眼がさめたとき、彼女はやっぱり靴屋の奥にねていた。あわてて起きあがったが、下半身は裸にされ、スカートもズロースもそばに放りだされてあった。まわりでは三人の与太者がげらげら笑いながら彼女のあわてぶりをみていた。体の感じで、彼女ははずかしめを受けたことを知った。

「進駐軍の命令で迎えにきた。騒ぐと命はねえぞ。おめえの体じゃもううちへはかえれねえから、おとなしくしな」与太者たちは半狂乱の彼女をトラックに乗せ、大森の慰安所へつれていった。何度も逃げようとしたが、監視がきびしくてだめだった。彼女は泣きながら、これも運命だとあきらめた。

彼女の夫、山口賢（二十六）は気狂いのようになって妻をさがして歩いた。この場合にも、日本の警察はまったく冷淡な態度を示した。アメリカ兵に凌辱されたらしいということがわかると、警察は完全に手をひいてしまった。彼はある日、同居している弟にＣＩＣ※へいってくるといってでかけたきり、消息を絶った。ＣＩＣへ問いあわせてみても、そんな日本人はこなかった、という返事があっただけである。そして十七日、自殺とも他殺ともわからない彼の死体が、蒲田の海岸で発見された。（類似例五）

※米軍の情報機関

4　Ｍ工場の女工員たち

川崎市のＭ軍需工場は空襲で焼けうせ、女子工員の寮が半分だけのこった。うちや家族のある者は故郷へかえったが、それらを戦災で失った娘たちは、戦争が終って一ヵ月たっ

てもまだ寮のなかで暮していた。彼女等のなかには、学徒動員でひっぱられた女学生も十何人かまじっていた。働くあてもなく、たべるものもなくなって不安な毎日がつづいているとき、ある日「新生社会事業会観光部」という看板をかけたトラックがやってきて、四人の復員者風の青年が「観光報国のために皆さんに働いてもらいたいから、ぜひおいでください。月給は高いし、食事はいまの日本のどこにもないすばらしいものです。われわれの会長が人道愛に燃えた慈善事業として経営する大会社へ、いますぐどうぞ」と熱心にさそった。

はじめ不安がっていた者も、結局この誘惑に負け、三十人の娘たちは二台のトラックにつめこまれて、人道愛に燃えた慈善会社——米軍慰安所へつれていかれた。白米の飯とコンビーフ（この二品が当時、貞操以上の価値をもっていたとしてもそうふしぎではない）がだされ、内務省の代表と称する男があらわれて「諸君らは誇りをもってこの特別挺身の任務を完遂し、畏きあたりのしんきんを安んじ奉らねばならない。諸君らこそ、日本帝国の歴史に千歳にのこる烈婦である」というような演説を長々とぶった。

夜になってアメリカ兵が押しかけてきたとき、逃げようとした者たちも、慰安所をとりまく武装ガードにつかまっていっさいをあきらめた。女学生のひとりは暁方、部屋の窓から逃げだしたところをガードにみつかり、「日本婦人らしくない卑怯な行為」をしたという

わけで、むごたらしいリンチを受け、右の眼をえぐりとられた。（類似例三）

5　江東女性軍第一中隊

江東方面では、軍部が本土決戦にそなえて大量の女性軍を編成しかけていた。軍隊的な思想と秩序によって、十五歳から四十五歳までの女性を統制し、傷病兵を看護させたり竹槍で戦闘させたりしようというのである。さいわい、その一部分が編成されただけで敗戦をむかえることになったが、すでにできあがっていた第一中隊（一〇三人）の運命は悲惨であった。埼玉県の農村に動員されて草取りにこき使われている最中、B29と小型機がいっしょになって彼女たちの街をおそい、一物ものこさず焼きはらってしまった。生きのこった二十人ほどの子供は母親をしたって埼玉県まで歩いてきた。しかし彼女たちは敗戦後も焼跡へかえってみることを許されず、女性軍総裁である某宮妃（名前を利用されていただけだが）と軍部の命令によって動員地の農村にとどまらねばならなかった。九月九日、「諸君は女子特攻隊として直ちに指定の場所におもむき、たえがたきをたえて全日本婦人のたてとなるべし」という指令（内務省治安当局がだした）によって、彼女たちは東京まで六里の道を歩き、四ヵ所の米軍慰安所に分散収容され、待ちかまえていたアメリカ兵た

ちに暴力で貞操を奪われた。母親が慰安所へぶちこまれるまえ、子供たちはトラックに乗せられ、ひとりずつ知らない街々へ捨てられていった。（類似例二）

6　横須賀の遊郭では

横須賀の遊郭の公娼たちは、敗戦のときまで日本の「海軍さん」に体を売って暮していた。彼女たちはみんな主人（売春業者）にたくさん借金があったので、金持の「海軍さん」に身受けしてもらうことだけを望みにしていたのだが、海軍が解体してしまうとそれもはかない夢になった。明日アメリカ軍が初めて上陸してくるという晩（八月三十日）、彼女たちはみんな一部屋に集められて、主人と警官と内務省の役人から「お前たちは明日からアメリカ人の相手をしなければならない。これはおかみからの命令で、われわれも謹んでお受けしたのだ。お前たちが犠牲になることによって日本の婦人たちはアメリカ兵の毒牙から逃れることができる。お前たちにとってはまことにつらい話だろうが、おかみの偉い方々が、お国のため、尊い皇室の姫君方のためにどうか頼むといって涙を流されたのだ。全日本の婦人の運命は、お前たちの肩にのみかかっておるのである」といいわたされた。彼女たちは自分の部屋にかざってあった日本の軍艦や水兵たちの写真を焼きすて、主人からくばられたWelcome, US soldierの紙をふすまに貼って新しい客をむかえる準備をした。

翌日、アメリカ兵たちはあとからあとから洪水のように押しよせてきた。はじめは怖しかったが、二三日たつと、もの珍しさも手つだって彼女たちはすっかり彼らと仲良しになった。彼女たちの部屋には、何年も見られなかったお菓子や煙草やセッケンがつみかさねられていった。彼等はみんな朗らかで、背が高く、美しくて、これでは日本の海軍が負けるのも当然のように思われた。戦勝者である彼等と肉体関係を結び親切にしてもらえることは、もと日本の水兵とつきあって感じた小さな誇りなんかくらべものにならないほど、彼女たちにとって嬉しくて、鼻の高いことだった。彼女たちは朝から晩まで何度となく、ならいおぼえたサンキュウソウマッチをくりかえした。

彼女たちはなじみになったアメリカ兵といっしょに、生れてはじめてジープでドライブをした。街のひとがみんなうらやましそうにみているので、彼女たちは得意だった。アメリカ兵たちは、手をふって笑っている娘たちをジープへ乗せ、人気のない海岸へ連れだして強姦した。彼等が強姦しているあいだ、慰安所の女たちはジープのなかでチョコレートをたべたりして待っていた。強姦された娘たちはたいていもううちへかえれないといって泣くので、そのまま慰安所へいっしょにつれかえるのが例になった。こんなふうにして、慰安所には毎日のように新しい女がふえていったのだった。（類似例十三）

7　広島女子青年団員

呉市のH軍需工場に動員されていた広島の女子青年団員十二人は、「聖戦を戦いぬくために、われら乙女の身と心を、畏くも天皇陛下に捧げたてまつる」という誓紙を三通書き、それに各自の血判を押して、広島県知事・H社長・女子青年団長に提出してあった。広島が壊滅し、彼女たちがひとり残らず孤児となったとき、工場長はその誓紙を泣いている彼女たちの前でひらひらさせ、そんな気の弱いことでどうする、ますます復讐の覚悟をあらたにしなければならないときに、そのざまは何事だと手荒く叱りとばした。

その夜監視のすきを見て三人が脱走したので、彼女たちは九人になった。いくら叱りとばされたところで、彼女たちのやる仕事なんかもう何にもなく、工場長がはいる防空壕をほったり、工場長夫人の着物をたんすに詰めて疎開先へ運んだりするだけだった。でも九人は日本が勝つことを信じて一生けんめい働いた。百山ちか子（十八）の妹が放射能で灼けただれた姿のまま広島から歩いてきたとき、工場長は彼女が姉に逢いたいというのをどうしても許さなかった。彼女は姉が働いている工場の門の前で死んだ。

やがて戦争が終った。「諸君がよく働かなかったからだ。諸君は深くざんげして国体を護持しなければならない。」工場長がそう演説したとき、九人は声をあげて泣いた。

戦争が終っても、彼女たちは解放されなかった。広島の女子青年団本部――そんなものはとっくに原爆でふっとんでしまっていたのだ――からの動員解除命令がでないかぎり、彼女たちはやはり奴隷であった。「そのうち敵軍が上陸してくるだろう。日本人の男はみんな殺され、女はみんな操を奪われるのだ。しかし諸君はそれを恥じて自殺したりしてはならない。自殺する前に、操を奪った敵兵の舌を噛み切って殺さなければならぬ。それが、動員中怠けた諸君の唯一の忠義の道なのだ。」彼女たちはいつのまにか工場長のいうことを何でも信ずるようになってしまっていた。彼女たちは日記や持物を焼き、身をきよめて、最後のご奉公ができるときを待っていた。

昭和二十年九月、英連邦軍を主とする占領軍がついに上陸してきた。H工場の寮からは彼等がジープに乗って右往左往しているのがはっきり見えた。二三日たったが、別に男たちが片っぱしから殺されたというはなしは聞かれなかった。しかしあちこちで女が強姦され、看護婦の寄宿舎にトラックで乗りつけてきた水兵たちが二十何人かの看護婦を全部傷ものにして立ち去ったというような噂が、どこからともなく街中にひろまっていた。九人はこんな噂をきくたびに、次は自分たちの番だ、と覚悟をきめるのだった。相手の舌を噛み切ることはできそうもないので、彼女たちは剃刀や小さなナイフを用意し、それをポケッ

トやモンペの紐のあいだにかくした。

九月の十四日のこと、「内務省指定・治安維持会中国地方幹事・米山源二郎」という名刺を持った男がH会社を訪れ、工場長に砂糖数罐と英国の煙草を贈った。二人は一時間ほど密談していたが、やがてつれだって九人が暮している寮へやってきた。もっとも、工場長はそこまで男を案内すると逃げるようにかえっていった。

男は九人の前に立ち、例の血判の誓紙をとりだして高く打振った。「いよいよ君たちのご奉公するときがやってきた。私は畏きあたりのご内意を受けて、大和撫子の範となるべき婦人を探すために、大阪からはるばるここまで参ったような次第である。きくところによれば君たちは広島であの災害に遭うべき筈だったのを、この工場にいたおかげで助かることができたのだそうではないか。これこそ神意である。しばしのあいだ生き永らえてご奉公せよという有難い神のみ心だったのだ。このように血判の誓紙を捧げた君たちの忠誠を、天もみそなわしたもうたのであろう。君たちは烈婦である。君たちでなければ日本の婦人の操を進駐軍の魔手から守りとおすことはできないであろう。」男の神がかりのようなこの熱弁に、彼女たちは実にやすやすとひっかかってしまい、たがいに水盃をかわしたあと、男につれられて外へでた。外には英軍のトラックが一台待っており、彼女たちがそれに乗ったとたん、真黒い幕がトラックの屋根の上から垂れさがってきて、彼女たちは何

も見えなくなってしまった。

トラックは長いあいだ走りつづけた。それも遠いところへ行くのではなく、すぐ近くへ行くのにいろんな道をわざとぐるぐる走りまわっているような感じであった。真暗闇のなかで、彼女たちははじめて不安な疑いが胸につきあげてくるのをおぼえた。運転手台のうしろをこぶしで叩いて、「どこへ行くんですか？　わたしたちはどうなるんですか？」と叫んでみても、答えはなかった。急に二三人が泣きだし、やがて九人は声をあわせて気狂いのように泣いた。

トラックがとまった。黒い幕がひきあげられたとき、彼女たちの眼を射すくめた真白い光があった。そのときはわからなかったが、あとでよく考えてみると、それは水兵たちが彼女たちに向けていたいくつかの機関銃の銃身だったらしい。ひとりがトラックからとびおりて盲滅法に逃げだそうとした瞬間、一連の銃声がひびき、彼女は倒れ、動かなくなった。（この少女の苗字は横谷又は横屋といった。名前は明らかでない）それから八人は次次に引きずりおろされ、まわりを囲んでいる木造二階建の家の中へひっぱりこまれた。（だから、トラックは中庭のようなところにとまっていたことになる。彼女たちを引きずりおろしたのは大部分が水兵だったが、なかには日本人の男もいた。）最初に家にはいった百山ちか子がポケットからナイフをだしてふりまわしたが、たちまち取押えられてしまった。

で業者にさんざんいじめられた。しかしまもなく病状が慢性化したので、七人は強制的に体を売らされた。ちか子の親友だった伊東メイ（十九）は遊びにきた士官に病気をうつしたという理由で、軍事裁判にかけられ、十月から二ヵ月間、軍港のなかで重労働をやらなければならなかった。（類似例三）

8　大野てい子・山崎麗子・山田えい子

大野てい子（十一――印刷の間違いではない、ただの十一才・武蔵野市・小学校五年生）三崎麗子（同じく十一・同・同）山田えい子（同・同・同）の三人は、十月の六日（あるいは七日？　八日？）、落葉しはじめた武蔵野の林のなかを、仲よく手をつないで歩いていた。学校の帰り、宿題のスケッチをしようと思って景色のいいところを探してあるいていたのである。気に入った場所はなかなかみつからなかった。みつかって腰をおろしても、米軍のジープがひっきりなしにとおるので、うるさくて絵なんかかけるわけがなかった。三人は町からだんだん離れて、いつかキャンプ・トコロザワの近くまで来てしまっていた。

そこに、とてもいい景色がひらけていたので、三人は腰をおろし、スケッチをはじめた。学校が二部授業でお昼までだったから、ずいぶん歩いたような気がしたけれども、まだ陽

は高かった。三人ははじめしゃべりあっていたが、もともと絵が好きだったので、だんだん夢中になり、黙りこくって、ほかのことは念頭になくなってしまった。三人とも派手な色のセーターを着、髪をおさげに結び、年の割には大きな方だった。

……と、突然、「オジョーサン！」という聞きなれない声が耳もとでして、先ず麗子が空中に抱きあげられた。彼女の悲鳴をきいて本能的に逃げだそうとしたてい子は、柔道の足払いのようなものをかけられてその場に倒れ、胸を強く打った。そしてえい子の上にはえい子の四倍もありそうなアメリカ兵が「ホ、ホー！」というような声（てい子にはそうきこえた）をあげながら馬乗りになろうとしているのが見えた。

てい子には、何が起ったのか全然わからなかった。麗子もえい子も同様だったろう。せいぜいアメリカ兵がいたずら――子供のいうような意味でのやんちゃないたずら――をしてきたぐらいにしか考えられなかった。しかしただのいたずらにしてはひどく乱暴だった。麗子と麗子を抱きあげたアメリカ兵は草むらのかげになって、てい子からは見えなかったが、眼の前でえい子がスカートをひきさかれるのははっきり見えた。と思う間もなく、自分のスカートも何かでびりッと切られたので、てい子はわっと泣きだした。

どんなにもがいてもアメリカ兵の体はびくとも動かなかった。てい子があまり泣いたためか、アメリカ兵はハンカチ（革？）か何かを彼女の口のなかに押しこんで、首を締めよ

うとした。彼女は全身がふるえて、怖しさのあまり泣くこともできなくなってしまった。するとアメリカ兵は首を締めるのをよして、今度はひどく痛いことをやりはじめた。彼女は不思議に気を失わなかったが、その痛みはそれまで経験したことがないような鋭いいやな痛みであった。痛みはとても長く、一時間以上も続いたように思われた。アメリカ兵が起きあがると、すこし痛くなくなった。口からハンカチがとりのけられたとたん、てい子はまた泣き叫んだので、アメリカ兵は彼女の顔を蹴り、それからジープ（すぐそばにとめてあった）に乗って走り去った。彼等がみんなで三人いたのかそれとも四人だったのか、彼女たちは誰もはっきりした記憶を持っていない。

てい子は、気絶している二人を、ゆすぶったり名をよんだりして正気にかえらせ、あたりに散らばっているスケッチブックやクレパスをひろいあつめた。せっかくできあがりそうになっていた絵は、アメリカ兵の靴にふみにじられてめちゃめちゃだった。宿題ができないことを思うと、彼女はまた泣けてきた。

もう日が暮れかかっていた。それにひどくさむかった。まだ痛くてはやく歩けないので、三人はすこしずつ歩いて家にかえった。はじめは誰にも黙っていようと思ったけれども、あまりひどく痛むのでえい子が先ず両親に打ち明け、次にてい子が母親にうったえた。ふつうの怪我以上の意味を持ったことだとは知らなかったから、ごく無邪気に、アメリカ兵に

乱暴されたので怪我をした、薬をつけてください、というふうにうったえたのである。てい子の母親は「お前……」といったきり卒倒した。しばらくして四五軒隣りにいるえい子の母親がやってきた。二人の母が泣くのを見て、てい子も泣いた。母親たちは二人を某婦人科医（特に名を秘する）のところへ連れてゆき、そこで傷の手当を受けた。麗子だけは、家が離れていたためか、別の病院へ連れてゆかれた。母親たちは、「このことは誰にも言わないで、はやく忘れておしまい。先生にもお友達にも言ってはいけません。それから、アメリカ兵がいそうなところには、もう決して近づいてはなりませんよ」と何度もくりかえしていうのだった。三人はその言葉を守って誰にも言わなかったけれど、忘れることだけはできそうもなかった。いや、忘れるどころか、成長するにしたがって、その忌わしい記憶もますます大きなものに成長していった。

……

（これからあとのことについては、この報告全体が年代を追って書かれている以上、当然あとの章に報告すべきだけれども、一方この事件と彼女たちのこれからあとのこととは、時間的に分割すべき性質のものでないようにも思われるので、とくに続けて書く。）この事件のあった翌々年つまり（一九四七年）、麗子とえい子は東京のミッション系の女学校

（新制中学）にはいり、てい子はそのまま武蔵野の新制中学にのこった。彼女はほかの二人に逢うのを避けた。また麗子とえい子も、女学校で違うクラスにはいってからは、たがいに逢うのを避けるようになっていたようだった。わたし（五島）が面接したのはてい子ひとりだけであるから、このあとはもっぱら彼女だけについて語るよりほかない。

……忌わしい記憶が消えることはなかったが、しかしあの事件の持っていた重大性はてい子にはまだまだわからなかった。あの事件によって自分が処女を失っていたこと——あのアメリカ兵たちの行為が強姦とよばれるべきものだったことを彼女が知ったのは、新制中学二年の秋、はじめて夫婦雑誌のようなものを買って読んだときからであった。それを知ったときの驚きと悲しみは、実際の事件のときに感じた驚きや悲しみと比べものにならないほど大きかった。中学を卒業する少し前、アドルムを飲んで自殺をはかったが、手当がはやかったため死ねなかった。気がついたとき、彼女はなぜ死なせてくれなかったのかと両親や医者にくってかかった。彼女は急にえい子と麗子に逢いたくなっていってみたが、えい子はちょうど修学旅行中、麗子の家はどこかへ移転したあとだった。（えい子の母親から、麗子が一年ほど前に女学校を退学したことを彼女はきいた。）

中学を卒業してから、てい子は東京のあるデパートで働くことになった。このころから彼女の性質は暗く、ひねくれていき、自分でもどうしようもなくなってしまった。知りあ

ったズベ公たちと映画館やダンスホールなどを遊びまわって、家には夜おそくでなければかえらず、時には全然かえらないこともあった。両親が叱ると、彼女はこう言って反抗した。「叱るくらいならなぜあのとき生きかえらせたりしたの？　それとも、もういちど死んだ方がいいって言うの？　私、自分のお金で遊んでるんだから、かまわないで頂戴。」

デパートに勤めてから半年ほどたったころ、彼女は化粧部へまわされた。あの事件があってからもう六年たち、彼女もそろそろ十七だった。デパートの月給だけでは遊ぶのに足りなかったので、彼女はショーウィンドーの香水や口紅などを少しずつ盗みだして、ズベ公の友達に売りさばかせ、儲けを山分けにするようなことをやりはじめた。しかし、一月ほどしてそれがばれ、彼女は部長に油をしぼられたすえ、首をきられた。部長の前で彼女は泣き、あらゆる媚態を見せたけれども、効果はなかった。首切りの理由が家に知らされたので、彼女は家出し、仲間が三人で借りているアパートへ行った。しかし仲間の態度が、金のない彼女にはひどく冷たく思われたので、そこにもいる気がなくなり、赤新聞で見た広告をたよりに、ダンサーになろうと思って横浜へでかけていった。

この頃が、この報告全体から言うと、ちょうど朝鮮戦争の長期化に伴う売春ブームの時期（第五部参照）にあたっていたのである。彼女は希望通り横浜の小さなキャバレーに住みこみ、一人きりの小部屋とふとんを借り受けることができた。（その前借りだけで優に

彼女の給料の七ヵ月分はあった。）そして毎晩アメリカ兵や英国兵やそのほかの国連兵とおどり、小部屋で彼等に体を売った。（彼女はデパート時代ズベ公とはつきあったけれども、男と遊んだことはなかった。それでこのキャバレーでも、はじめはほとんど強姦同様の有様で客をとらされたのである。しかしもう子供のときのような痛みや悲しみは湧いてこなかった。）私の一生は、あの十一才の事件のときもうふみにじられてしまったのだ、と彼女は考え、そのことをいろんな兵隊にしゃべり、やけっぱちな態度で身をまかせた。

そして、てい子についての記録の結末はいささか小説的である。ある日――もう一九五二年にはいってからだったが――彼女がこれから彼女を買おうとする兵隊と腕をくんで港通りを歩いていたとき、やはり向うから水兵と女が並んで歩いてくるのとぶつかった。すれ違うとき、彼女とその女はたがいにじろりと睨みあうようにしたが、瞬間がく然として、二人とも立ちどまってしまった。その女は、ほとんど昔の面影はなかったが、たしかに三崎麗子であった。――少くともてい子にはそう思えた。彼女は声をかけようとしたが、その女があわててつんと前を向いて通りすぎていったので、彼女もそのまま通りすぎてしまった。彼女はもういちどふりかえってみたが、その女はとうとうふりかえらずに歩いていったというのである。しかしわたしは麗子という女性に逢ったことがないので、このてい子の話の真偽を断言することはできない。（類似例七）

第二章

敗戦――政府・銀行・売春業者の陰謀――
強姦！　強姦！　強姦――慰安所――
美徳の利用――性病まんえん――オフ・リミッツ

洋娼の発生は、米軍の日本占領と同時にはじまった。

発生の根本的な原因が、日本の敗戦と米軍の上陸にあることはいうまでもあるまい。しかし、敗戦後二ヵ月もたたないうちに全国で三万五千人もの洋娼が発生させられたのは、決して米軍の上陸そのものに原因があったのではなく、当時の日本政府が銀行や売春業者と結んで積極的に大量の洋娼を作りだしたためであった。

占領軍当局は、兵隊たちが日本の女性から性的サーヴィスを受けるのを黙認または公認する態度をとっていたが、自分からすすんで慰安所を作ろうというほど熱心だったわけではない。ところが日本の政府の方では、征服者の歓心を買い自分たちの権力を維持するため